

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第328次発掘調査報告書 —

2016

姫路市教育委員会

序

姫路市内では、現在 1,200 箇所以上の遺跡が知られています。近年、開発工事に伴う発掘調査が増加しており、平成 26 年度では大小合わせて年間約 600 件を数えました。

平成 21 年 10 月以来おこなわれてきた平成の修理を終え、平成 27 年春にグランドオープンした姫路城大天守、その周囲には武士・町人らが生活した城下町が広がっていました。太平洋戦争時に一帯が空襲を受けたことに加え、その後に市街地化が進行したため、城下町の名残を残す建造物はほとんど残されておられません。しかし、これまでの発掘調査によって、地中には城下町の遺構が眠っていることが明らかになっています。

本書で報告する姫路城跡第 328 次調査は、姫路城外曲輪南西部の武家屋敷地や寺社の境内に該当する地点で実施されました。ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査・研究に資する所存です。

最後に、発掘調査・整理作業の実施にあたり多大なご協力を賜りました関西電力株式会社、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫

例言・凡例

1. 本書は、姫路市忍町・十二所前町地内で実施した姫路城城下町跡(姫路城跡第328次発掘調査)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、関西電力株式会社による地中送電管路築造に先立って実施した。
3. 発掘調査は、関西電力株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会が実施し、現地調査は大谷輝彦・森 恒裕・小柴治子・中川 猛・福井 優・南 憲和・黒田祐介・関 梓が担当した。整理作業及び報告書の編集は、黒田が担当した。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用した。方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、遺構種ごとにつけた。遺構種略号は次のように呼称する。
柵：SA 井戸：SE 溝：SD 土坑：SK 不明：SX
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご援助を頂いた。
関西電力株式会社 菅原土木株式会社 有限会社松浦興業

現地調査開始から整理作業終了までの体制

姫路市教育委員会

教育長 中杉隆夫
教育次長 林 尚秀 (～平成27年6月30日)
八木 優 (平成27年7月1日～)

生涯学習部

部長 小林直樹 (～平成27年3月31日)
植原正則 (平成27年7月1日～)

文化財課

課長 福永明彦 (～平成27年6月30日)
花幡和宏 (平成27年7月1日～)
係長 大谷輝彦

埋蔵文化財センター

館長 秋枝 芳
係長 岡崎政俊
森 恒裕
技術主任 小柴治子
中川 猛
福井 優
南 憲和
技師 黒田祐介
関 梓
主事 小林啓佑
嘱託職員 香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代
整理補助員 黒岩紀子、清水聖子、寺本祐子、藤村由紀

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過1

第2節 姫路城城下町跡における調査地の位置1

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区の基本層序2

第2節 本発掘調査の成果2

第Ⅲ章 総括

第1節 遺構4

第2節 遺物4

図版目次

図版 1 / 図1 調査位置図

図版 2 / 図2 調査区平・断面図1

図版 3 / 図3 調査区平・断面図2

図版 4 / 図4 調査区平・断面図3

図版 5 / 図5 調査区平・断面図4 図6 遺構断面図

図版 6 / 図7 出土遺物 図8 街路および屋敷地内の溝と現状地形図

写真図版目次

写真図版1 / 調査地全景 35m地点基本層序 SK01 SD01 30～40m地点 SD02

写真図版2 / SA01 SA02 SA03, SD04, SD05, SD06 SD07石組み SA03根石

SK02 SK02土層断面

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯と経過

姫路市忍町・十二所前町地内において、関西電力株式会社による地中送電管路の築造工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に該当している。そのため、平成 26 年（2014 年）4 月 22 日から 27 日にかけて確認調査を実施した（遺跡調査番号：20140032、姫路城跡第 319 次調査）。近世の遺構埋土及び遺物を確認したことから、平成 26 年 9 月 24 日に『姫路市道幹第 8 号線（忍町及び十二所前町）における工事に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）に関する協定書』を関西電力株式会社と取り交わし、同日『姫路市道幹第 8 号線（忍町及び十二所前町）における工事に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約（平成 26 年度）』を締結した。

本発掘調査の対象面積は 258 m²で、調査区は東西延長 220m に及ぶ。調査地は自動車走行車線内のため、調査区を 25 分割し、1 日 1 区のペースで東から調査を進めた。調査は平成 26 年 9 月 26 日から 10 月 11 日の実働 12 日と、平成 27 年（2015 年）3 月 4 日から 3 月 17 日の実働 9 日で実施した。また 9 月 26 日から 10 月 10 日は昼間調査で、それ以外は夜間調査である。工事計画の変更により平成 26 年度は延長約 180m の調査を完了し、残り約 40m は平成 27 年度に実施することになった。平成 27 年 3 月 31 日に変更協定・変更契約を締結し、平成 26 年度の事業を完了した。平成 27 年度は 7 月 23 日に第 2 回変更協定を締結し、同日『姫路市道幹第 8 号線（忍町及び十二所前町）における工事に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約（平成 27 年度）』を締結した。調査は 7 月 30 日から 8 月 4 日の実働 4 日で、昼間に実施した。

整理作業及び発掘調査報告書の作成は、平成 27 年度に実施した。

第 2 節 姫路城城下町跡における調査地の位置

姫路城は、池田輝政により慶長 6 年から 9 年の歳月をかけて築かれた平山城である。大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐらされ、武家屋敷地・町屋等を囲い込む惣構の縄張りが採られている。

調査地は大天守から 1.2km、外曲輪の南西部に位置する。18 世紀中葉に描かれた酒井時代の絵図『姫路侍屋敷図』をもとに当時の地割や屋敷割を現在の地形図上に推定復元した『姫路城跡（城郭図）』（図 1）によると、調査地は武家屋敷地、寺社地及び街路に該当している。

姫路城及び城下町に関しては、多くの絵図が残されている。それらによると、調査地は外堀に沿って築かれた土塁の北に位置する。第 2 次本多時代以降の絵図では土塁沿いに「中間長屋」「同心クミ」「組屋舗」の記述がある。その北面には東西方向の街路が延びる。この街路の西の突き当りには十二所神社があり、江戸時代を通じて全ての絵図に描かれている。この街路の北面には武家屋敷地が描かれている。武家屋敷地の数は当初 6 軒であったが、第 2 次榊原時代にはその西端の武家屋敷地が「光栄寺」に変わり、武家屋敷地は 5 軒になる。

調査地にかつてあった武家屋敷地の住人の名は絵図から読み取ることができる。そのうち主だったものを示す。第 1 次榊原時代の慶安 2 年（1649 年）から寛文 7 年（1667 年）頃の様子を描いたとされる『姫路御城廻侍屋舗新絵図』によると、武家屋敷地は 6 軒で西から「渡辺仁右衛門」「柘植會兵衛」「池井仁兵衛」「竹村惣五郎」「天野谷善五郎」「辻三太夫」である。酒井時代入封初期（1749 年頃）の絵図『白鷺城旧図』では光栄寺の記載があるが、酒井時代の 18 世紀中葉の様子を描いたとされる『姫路侍屋敷図』では、光栄寺が「寺跡」と表記される。武家屋敷地は 5 軒で、西から「西嶋喜右衛門」「組屋舗」「侍屋舗」「組屋舗」「組屋舗」である。宝暦 7 年（1757 年）の『酒井家家臣江戸・姫路組分帳』には「西嶋喜右衛門」の名が記されているが、禄高・役職ともに不明である（姫路市 1986）。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区の基本層序

路盤(アスファルト舗装及び碎石等)の厚さが約90cmで、調査区の大部分ではその直下が遺構面である。遺構面の標高は10.7mから11.4mで、西に向かって徐々に高まっている。遺構面は1面であった。また調査区東端から20m地点以東では、地山は確認できていない。

遺構面を形成する土層は、10YR3/1 黒褐色～10YR6/3 にぶい黄橙色砂礫層と7.5YR4/1 褐灰色～10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土である。砂礫層は調査区東端から30m地点以東と140m地点以西で遺構面を成している。

第2節 本発掘調査の成果

調査区は総延長220mを超えるが、幅が狭く、面的な遺構の把握ができていない。それに加え、検出した遺構は上部が路盤により破壊されており、遺存状況が悪かった。出土遺物や埋土の状況から中世以前のものとした遺構もあるが、大部分は近世のものと認識している。このような状況を踏まえて、本節では検出した遺構・遺物のうち、特に重要なものについて触れる。

1. 中世以前の遺構 : ピット14基、不明遺構2基を確認した。

ピット 時期を特定しうる遺物は出土していない。多くは灰白色の埋土をもつ。

SX01 調査区東端から20m地点以東で検出した。その規模や最深部の標高は不明である。埋土からはわずかに遺物が出土し、そのうち須恵器碗を2点図化した(図7-1・2)。1は残存高1.7cm、底部復元径8.1cmを測る。底部糸切りで、平高台をもつ。2は残存高2.2cm、底部径6.0cmを測る。底部糸切りで平高台をもつ。森内秀造氏による編年第3段階b期(10世紀前半～12世紀前後)の範疇に収まるものであろうか(森内1995)。ひとまず、この遺構の埋没時期を考える上での手掛かりとして評価しておきたい。

SX02 125m地点付近の調査区南壁際で検出した。遺構の大部分は調査区外であるため規模等は不明で、深さは5cmである。出土遺物には東播系須恵器碗、瓦器碗、土師器皿、土師器塙がある。点数が少なく大半が小片のため図化はしていないが、その特徴を示しておきたい。東播系須恵器碗は体部から口縁部へ直線的に伸びるタイプで、復元口径17.0cm、その他法量は不明である。森田稔氏の編年第Ⅱ期第2段階(12世紀末葉～13世紀初頭)にあたる資料であろうか(森田1995)。瓦器碗は、復元口径16.0cmを測り、その他法量は不明、器厚は3mmと非常に薄い。体部は内湾し、口縁部はわずかに外湾する。口縁端部は丸くおさめる。器表は荒れており、内面にヘラミガキの痕跡がわずかに残るものの、施された方向等は全く不明である。土師器皿は破片で8個体分以上出土した。そのうち法量計測が可能な3個体に関しては復元口径9.0cm前後、器高1.2cmを測る。また成形方法としては、手づくね成形とロクロ成形(底部糸切り)の両者が存在する。土師器塙は、口縁部片のみのため法量は不明である。口縁端部を丸くおさめており、口縁部は直線的に外方に伸びる。内面はハケ調整である。長谷川眞氏の分類「鉄鍋形タイプ」で、編年Ⅰ期(13世紀前半)におさまる資料であろう(長谷川2007)。その他、遺構面精査時に東播系須恵器鉢が出土したが、これもSX02に本来伴うものと考えられる。片口部分は出土していない。復元口径は31.0cmを測り、その他法量は不明である。口縁端部の拡張が明瞭ではなく、単に肥厚させたような形状であることから、森田氏の編年第Ⅱ期第2段階にあたるものと考えられる。以上から、本遺構の出土遺物は概ね13世紀前半の年代を示しているといえる。

2. 近世の遺構 : 柵4条、ピット54基、井戸1基、溝7条、土坑31基を確認した。

SA01 95m地点付近で検出した。他の柵と比べ北側(武家屋敷側)にやや入り込んでいる。柱穴は2基が確認でき、直径約40cmの円形で、深さ25cmを測る。柱穴の心々間距離は約3.6mである。底には20cm大の円礫が

根石として据えられている。時期を特定しうる遺物は出土していない。なお、本書では柵として報告するが、調査区の制約から後述の SA02～04 も含めてその性格に関して断定は困難である。

SA02 100m 地点で検出した。柱穴は 4 基が確認でき、西端の柱穴を除いて、直径約 50cm の円形で深さ約 15cm を測る。中央の 2 基には根石として 30cm 大の円礫が据えられている。柱穴の心々間距離は西から 1.4m、1.6m、1.6m である。西から 3 基目の柱穴からは、土師器皿小片が出土した。

SA03 110m 地点付近で検出した。柱穴は 3 基確認できる。柱穴は直径 50cm から 70cm の円形とみられ、深さは 40cm から 70cm である。東端の柱穴には 30cm 大の角礫が根石として据えられている。柱穴の心々間距離は約 1.9m である。西端の柱穴からは遺物がわずかに出土したが、時期の特定は困難である。

SA04 120m 地点付近で検出した。SK02 に切られる。柱穴は 4 基で直径 30cm から 40cm の円形、深さは約 20cm である。柱穴の心々間距離は西から 3.2m、2.9m、3.5m である。遺物はない。

SE01 今回確認した唯一の井戸である。掘方の直径約 1.5m を測る。遺構検出面から 1m ほど掘り下げたが、石組みは確認できていない。遺物はない。

SD01 15m 地点で検出した。調査区にほぼ直交する。幅 50cm、深さ 25cm の断面「U」字状の溝である。遺物には、京・信楽系施釉陶器碗や施釉陶器行平がある。18 世紀以降のものである。

SD02 40m 地点付近で検出した。幅 55cm、深さ 35cm の断面「U」字状の溝である。遺物はない。

SD03 70m 地点付近で検出した。最大幅 1.2m、深さ 15cm の断面「L」字状の溝である。遺物はない。

SD04 100m 地点から 115m 地点まで延び、途切れる。幅約 30cm、深さ 5cm を測る。遺物はない。

SD05・SD06 幅 20cm、深さ 5cm から 10cm を測る。切り合い関係はなく、埋土は共通していた。一部途切れるが、SK02 上面まで延びる。溝内には直径 10cm の丸太が据えられていた。遺物はない。

SD07 150m 地点付近で検出した。石組みを伴う溝である。攪乱を受けているが、検出部の幅 70cm 以上、深さは 40cm を測る。石組みは 10cm から 30cm 大の円礫が用いられており、現状での高さは 25cm で、2 段分が残存していた。遺物はない。

SK01 SE01 に近接して確認した。東西約 1.3m のやや不整形な土坑で、調査区南壁の状況から、50cm 以上の深さがあったことがわかっている。わずかながら遺物が出土しており、そのうち、3 点を図化した(図 7-3・4・5)。3 は口径 14.0cm、器高 3.8cm、高台径 8.7cm、高台高 0.6cm を測る染付磁器皿である。大橋康二氏による編年 IV 期(1690～1780 年代)にあたる(大橋 1989)。4 は関西系焼締陶器播鉢である。残存高 9.6cm を測り、その他法量は不明である。口縁部内面に凸帯がめぐり、放射状の播目が入る。以上の特徴から白神典之氏の編年 I 型式(18 世紀前半～中頃)にあたる(白神 1992)。5 は丁銀形土製品で、型押による成形である。残存長 8.2cm、最大幅 3.2cm、最大厚 0.9cm を測る。色調は 7.5YR7/4 に近い橙色を呈する。表面両端の直径 1.2cm の凹部に「文」がみえる。中央部は凸線で 3 段 6 分割され、上下段は「寶」、中段左に恵比寿、右に大黒天が型押しされる。裏面は無文で、ナデ痕が認められる。また凹部と「寶」の間には直径 0.35cm の穿孔があり、粘土の動きから表面から裏面へ向けて穿孔されたことがわかる。また表裏両面には暗灰色の付着物があり、鍍銀痕跡の可能性もある。

SK02 130m 地点で検出した。東西に細長い土坑で、SA04 を切る遺構である。長軸 5.0m、幅 70cm、深さ 50cm を測る。断面は「V」字状を呈し、砂礫からなる埋土をもつ。遺物はわずかで小片が主であるが、土師器皿と備前焼播鉢がある。土師器皿は手づくね成形で、口縁部及び内面にヨコナデ調整がなされ、それ以外はナデ調整である。備前焼播鉢は体部のみで、斜め方向の播目が認められる。遺物が少なく時期特定の根拠としては弱い。この 2 点の遺物からは 17 世紀前葉頃の時期を導ける。

SK03 175m 地点で検出した。SK04 を切る遺構で、直径 1.7m の円形を呈するとみられる。深さは約 80cm で底には 60cm 大の凝灰岩の角礫が据わっていた。人為的なものかは不明である。遺物はない。

SK04 175m 地点で検出した。SK03 に切られる。東西 2.1m、深さ 80m を測る。遺物はない。

第三章 総括

第1節 遺構

本節では検出した遺構の大半を占める近世の遺構の評価をおこなう。

SA01・SA02・SA03・SA04・SD04・SD05・SD06・SD07・SK02 はほぼ一直線に並ぶ遺構の一群である。これらは図1の『姫路城跡(城郭図)』で推定復元されている街路とは若干位置が異なるが、街路北端と武家屋敷地の境界に関連する遺構として評価したい。今回の調査成果からは街路に側溝が伴っていたかは不明とせざるをえない。ただし、時期は不明であるがSD05・SD06には丸太が据えられていたことから、何らかの構造物が存在した可能性は高い。また柵として報告した遺構に関しても、屋敷地に伴うものではなく、街路端の構造物に伴う可能性もある。これらの直線上には間知石による石組みが残されていたことから、近代までこの境界が機能していたこともわかった。さらにSD07とSK03の間に近世の遺構が全く認められないのは、攪乱のためだけではなく、街路であったことも理由に挙げられよう。以上の状況を踏まえると、この遺構群より南で検出した遺構は城下町整備以前のものか攪乱の可能性が浮上してくるが、遺構埋土や出土遺物からは時期の判定は困難である。また、これより北で検出した近世の遺構は武家屋敷地・寺院に伴うものと考えられる。

この街路の西の突き当りは、第I章第2節で触れたように十二所神社旧境内にあたる。SK03・SK04が街路と境内のどちらに属す遺構か現状では明らかではなく、明確な時期・性格も不明である。街路に土坑等の遺構が残されることはないという前提に立てば、ひとまず街路の西端はSK03・SK04より東側にあると推測される。この点に関してはこれ以上の検討材料もないため、今後の調査課題として残しておきたい。

SD01・SD02・SD03は、武家屋敷地に伴う遺構である。図1と図8の比較では、この3条の溝は現在推測されている武家屋敷地間の境界近くに延びていることがわかる。この溝自体が敷地境の役割を果たすかは不明だが、ひとまず敷地境の位置を推測する手掛かりとして評価し、今後の調査による検証を待ちたい。

第2節 遺物

今回出土した特徴的な出土遺物として、丁銀形土製品が挙げられる。姫路城跡における丁銀形土製品の出土は、本例で3例目である。他の2例はともに中曲輪における武家屋敷地の調査で出土した(姫路市教育委員会文化課2001・2003)。この2例は同じ型によるものである。うち1点は19世紀代の遺物とともに出土した。用途としては、神社の縁起物の可能性が指摘されている。この2例と本例を比較すると凹部に「文」がみられ、「寶」字や恵比寿、大黒天があしらわれるなど、文様構成は共通している。ただし、「文」や「寶」の細部には差異が認められるため、本例は他の2例と別の型によって製作されたと考えられる。

【引用・参考文献】

- 大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55)ニュー・サイエンス社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)
白神典之 1992『堺摺鉢考』『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会
姫路市 1986『姫路市史』第10巻(史料編 近世1)
姫路市 1996『姫路市史』第11巻上(史料編 近世2)
中井淳史 2007「中世播磨の土師器様相」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編 中世シンポジウム「中世窯業～生産技術の展開と編年～」実行委員会
乗岡 実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
長谷川 眞 2007「播磨の土製煮炊具」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編 中世シンポジウム「中世窯業～生産技術の展開と編年～」実行委員会
姫路市教育委員会文化課 2001『特別史跡姫路城跡Ⅰ』(国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告①)
姫路市教育委員会文化課 2003『特別史跡姫路城跡Ⅱ』(国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告②)
姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』
森内秀造 1995「相生窯址群における編年の再考」『相生市・緑ヶ丘窯址群Ⅱ』(兵庫県文化財調査報告第139冊)兵庫県教育委員会
森田 稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号(財)神戸市スポーツ教育公社
森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

図版 1

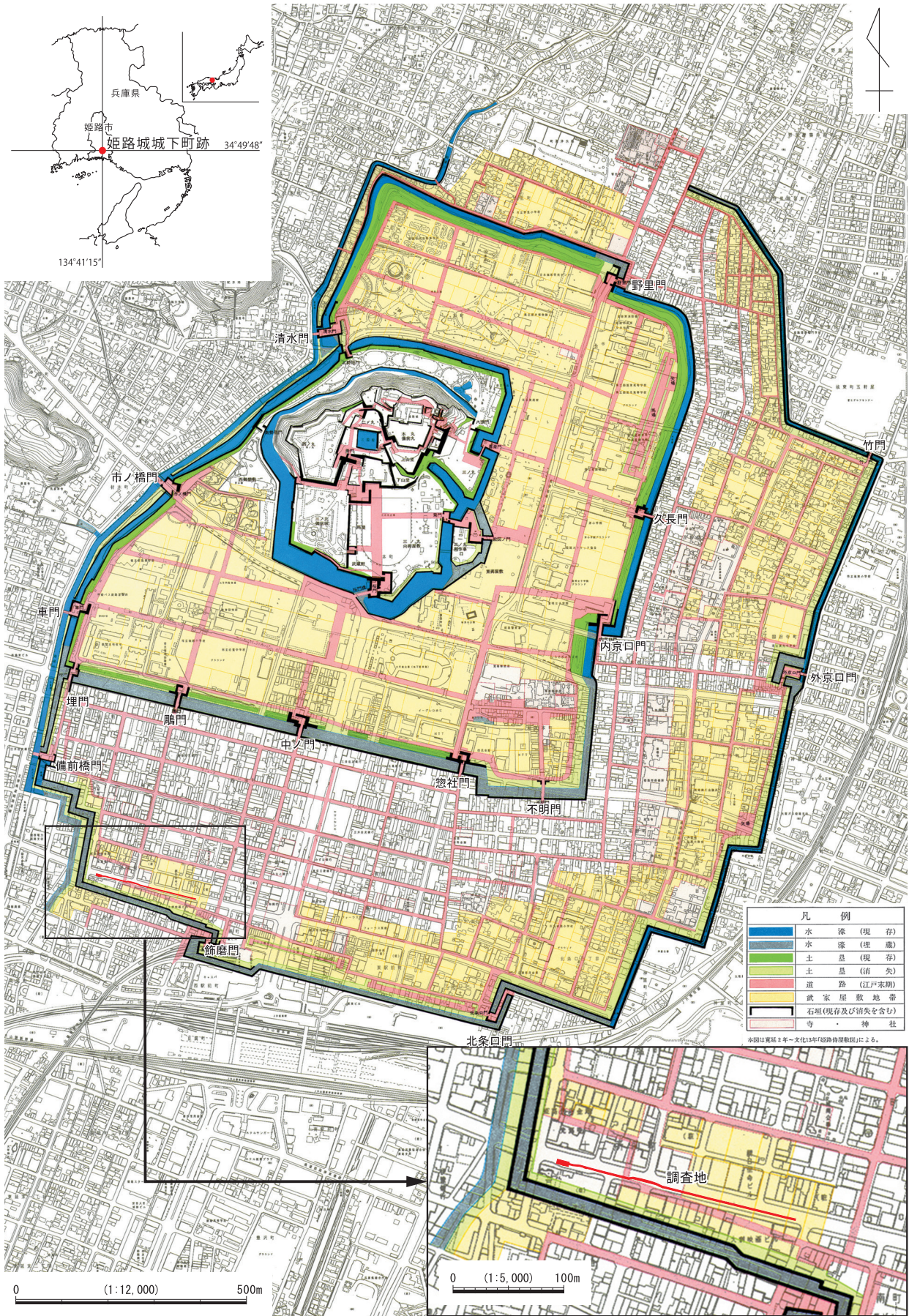


図1 調査位置図

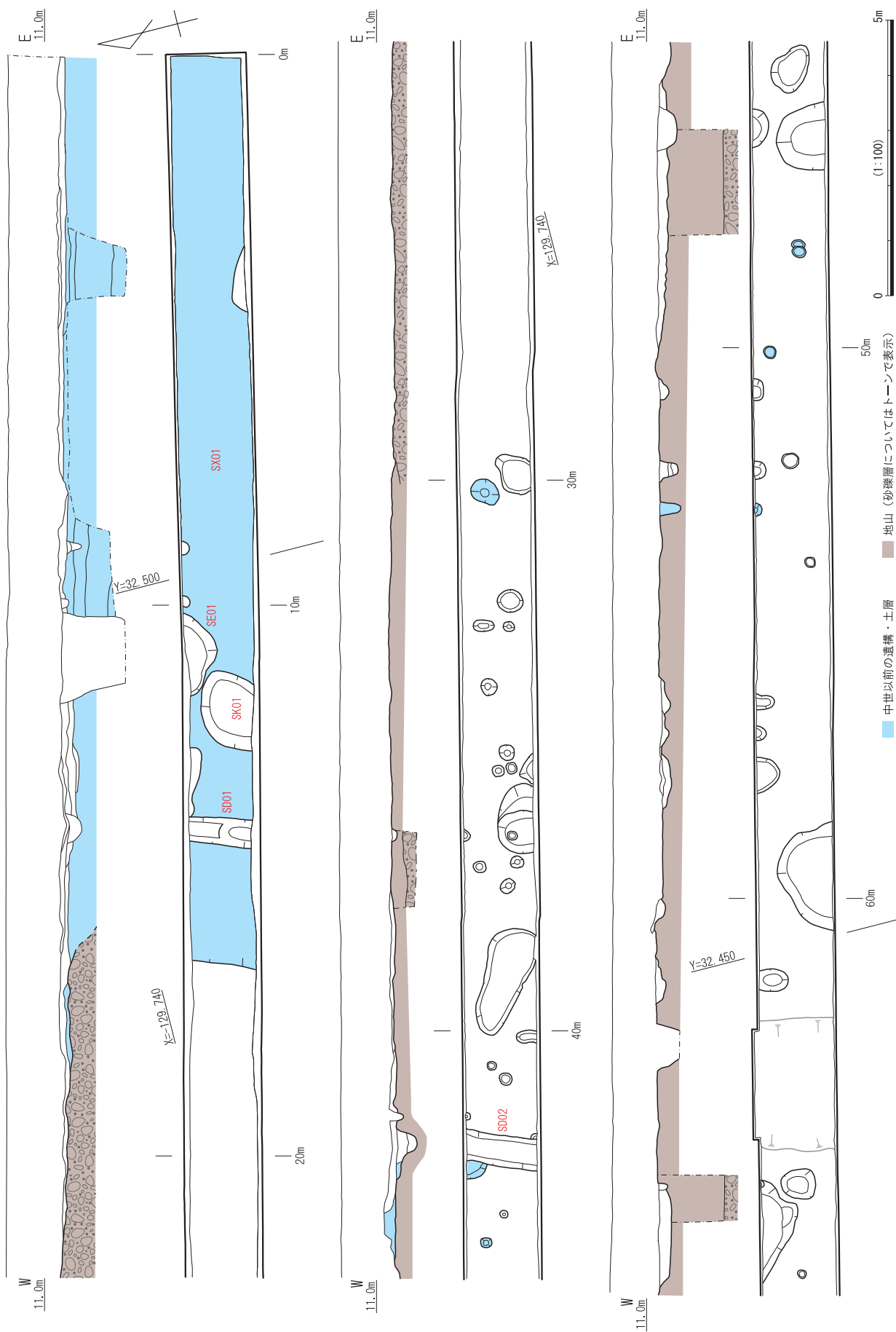


図2 調査区平・断面図1 (S=1:100)

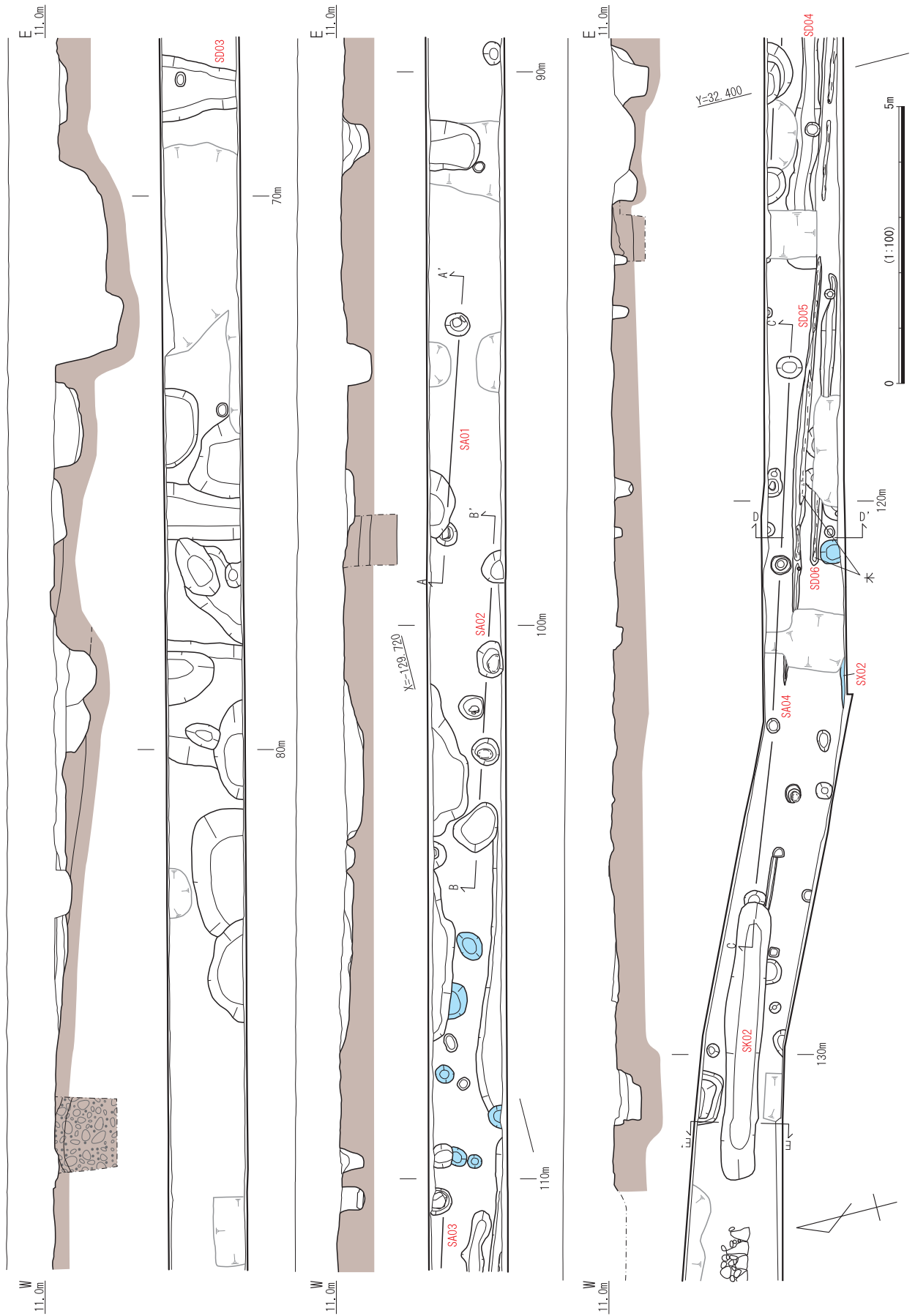


图3 調査区平・断面図2 (S=1:100)

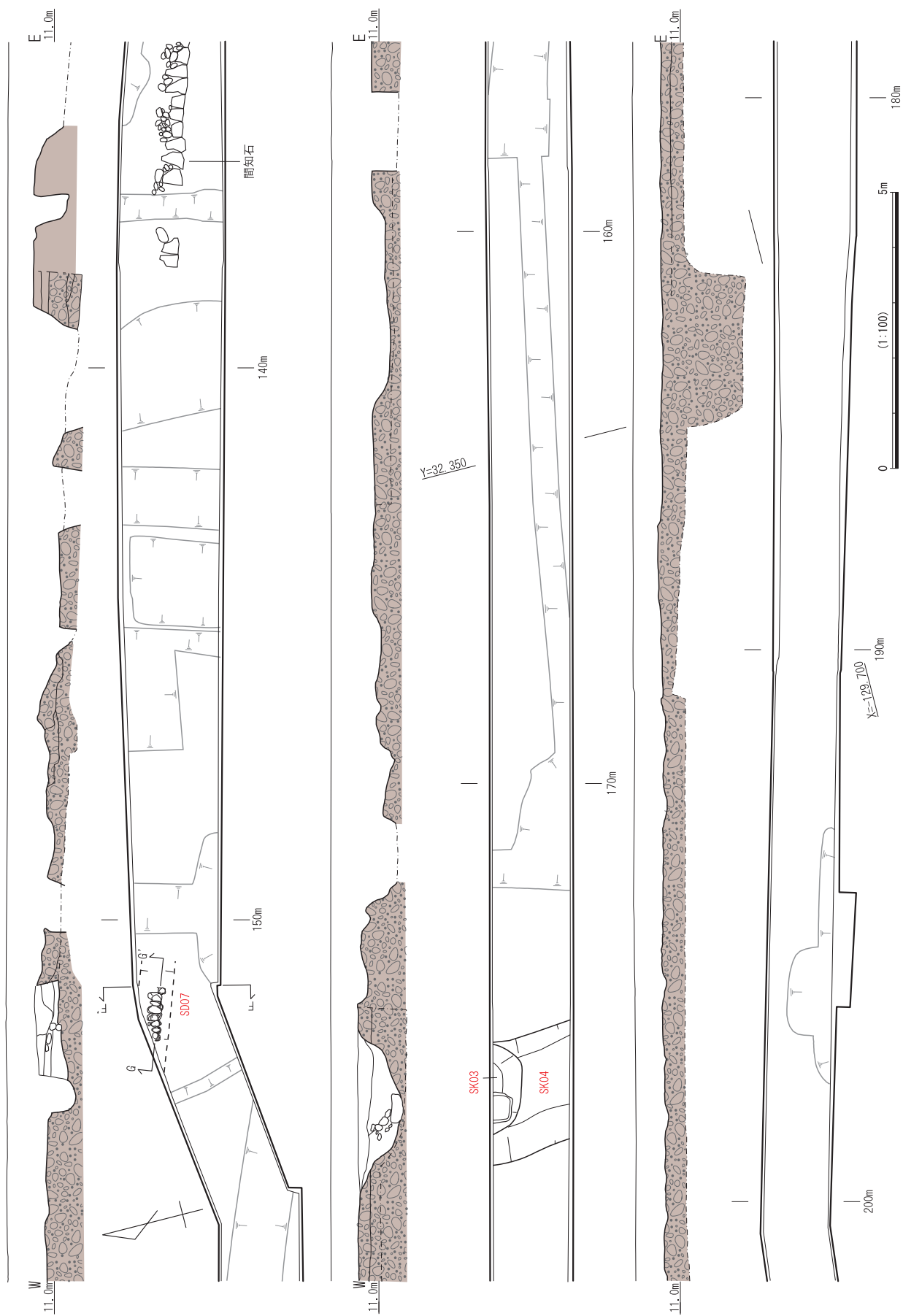


図4 調査区平・断面図3 (S:1:100)

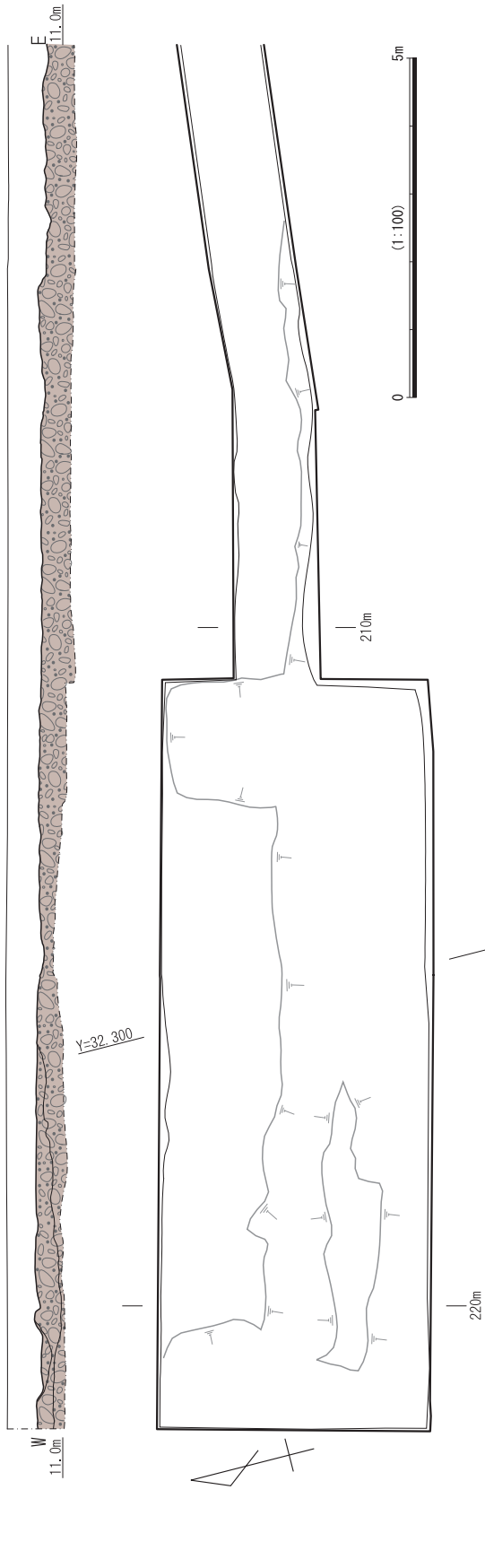


図5 調査区平・断面図4 (S=1:100)

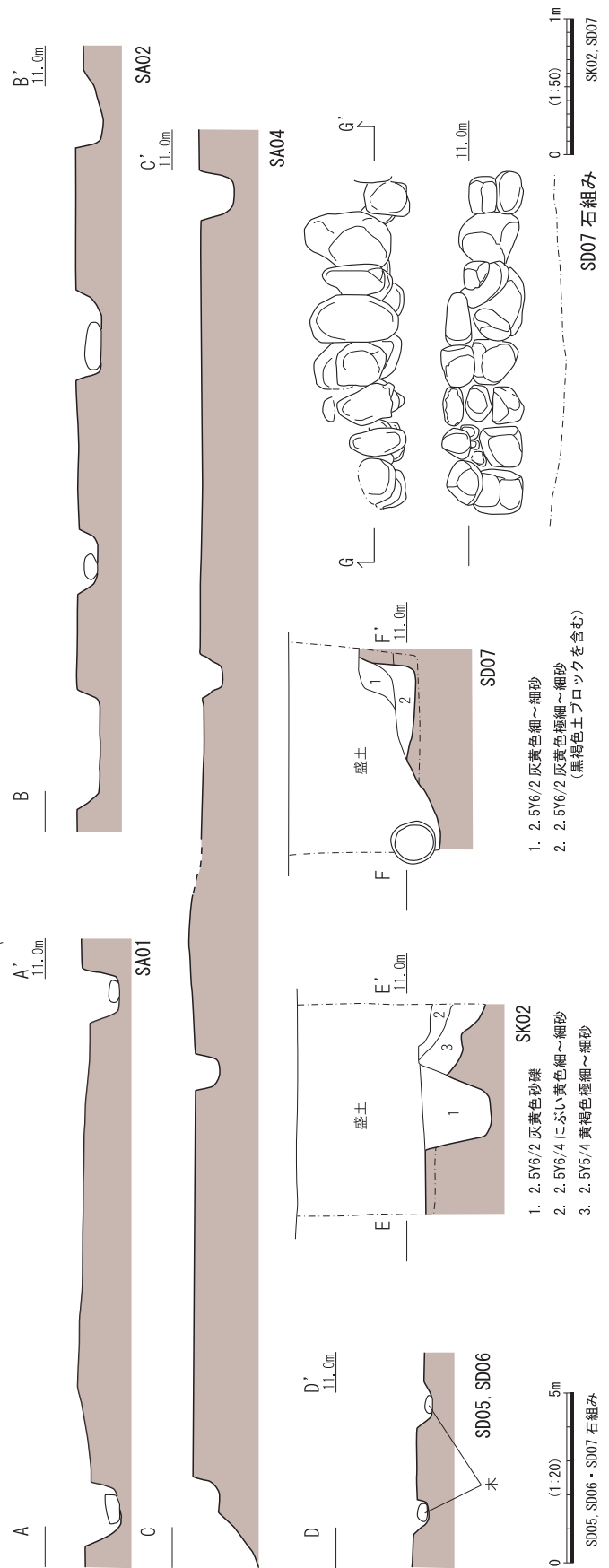


図6 遺構断面図

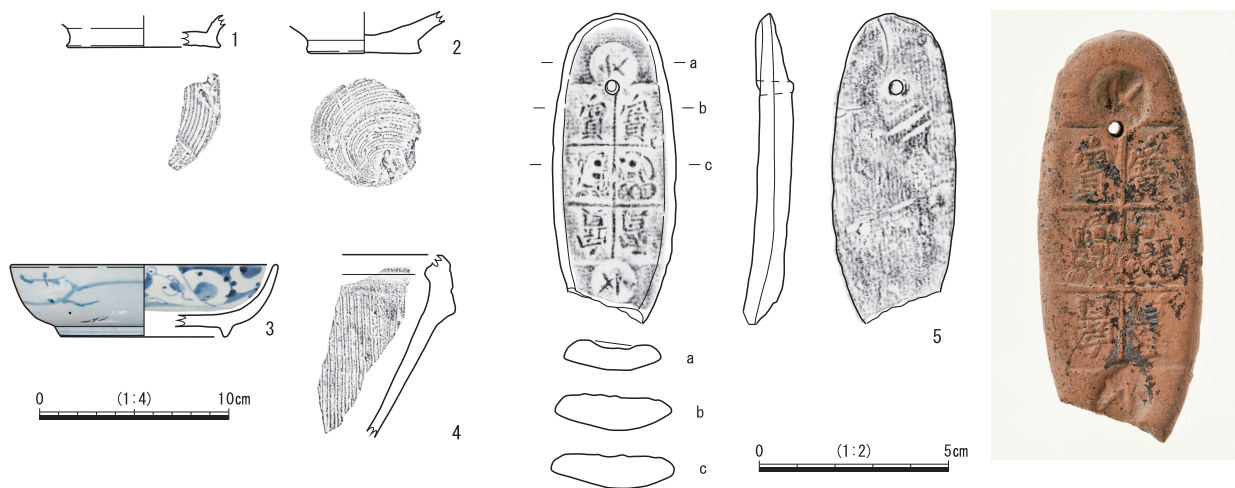


図7 出土遺物

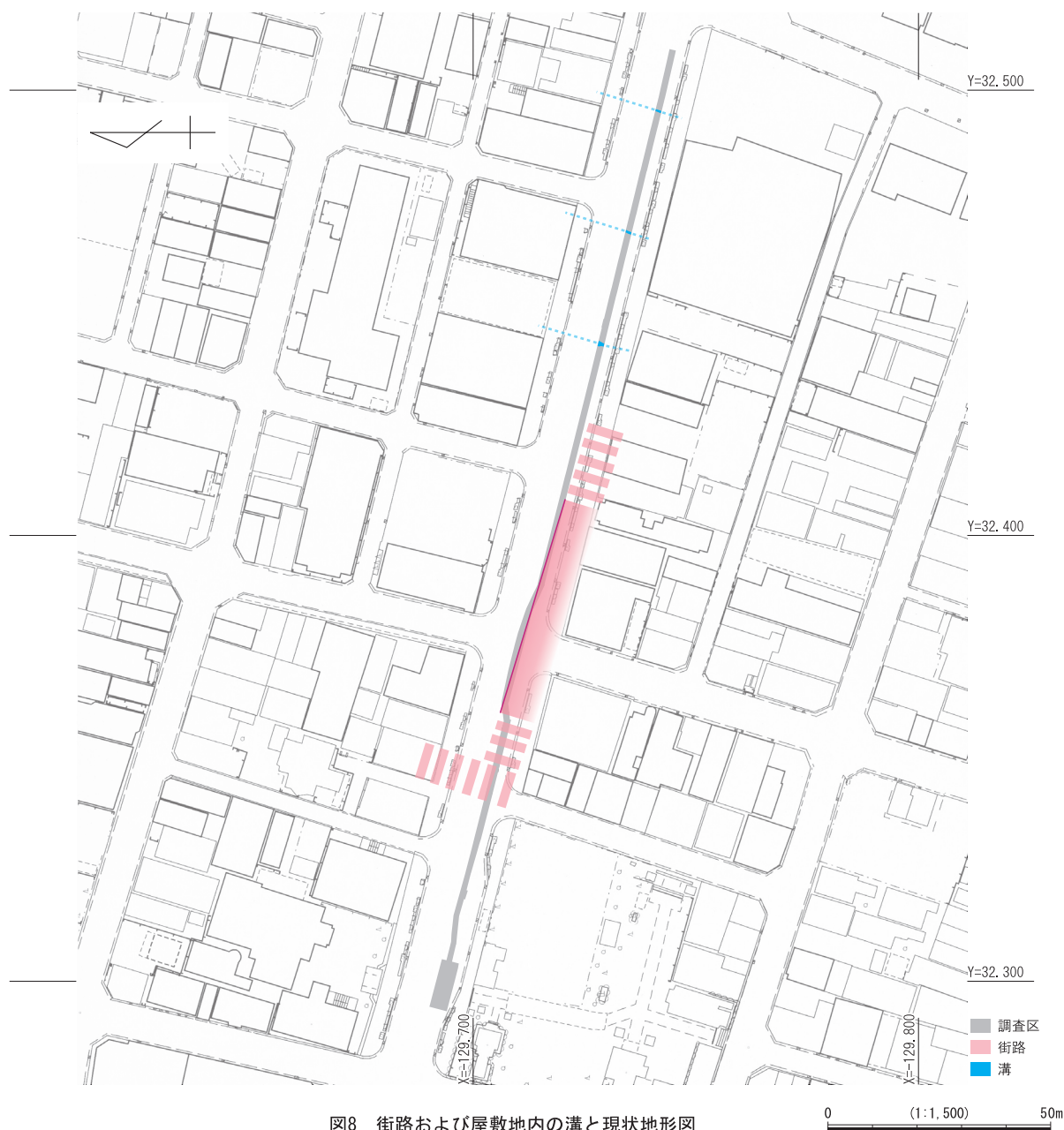


図8 街路および屋敷地内の溝と現状地形図

写真図版 1



調査地全景 (100m 地点西から)



SD01 (南から)



30 ~ 40m 地点 (西から)



35m 地点基本層序 (南から)



SK01 (北西から)



SD02 (南から)



SA01 (西から)



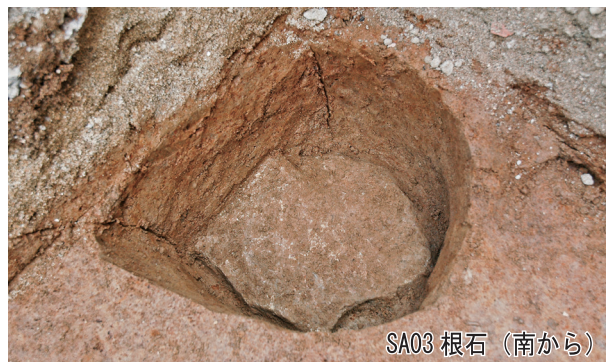
SA02 (東から)



SA03, SD04, SD05, SD06 (東から)



SD07 石組み (南から)



SA03 根石 (南から)



SD07 石組み (南から)



SK02 土層断面 (東から)



SK02 (東から)

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第328次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	黒田 祐介							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1							
発行年月日	平成28年(2016年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	258 m ²
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひめじしのおまち 姫路市忍町・ じゅうにしよまえちよう 十二所前町 地内	28201	020169	34°	134°	2014.9.26 ～ 2015.8.4	調査原因	地中送電 管路築造
				49′ 48″	41′ 15″		調査番号	20140290
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	平安時代 鎌倉時代 江戸時代		不明遺構 不明遺構 柵・ピット・溝・土坑		須恵器 須恵器・土師器・瓦器 染付磁器・陶器・土師器・ 丁銀形土製品		
要約	<p>関西電力株式会社の依頼を受けて、姫路市市道幹第8号線(十二所前線)における地中送電管路築造に先立って発掘調査を実施した。その結果、平安時代以降の遺構・遺物を確認した。</p> <p>平安時代の遺物が出土した遺構は大型であるが、その性格は不明である。鎌倉時代の遺構からは13世紀初頭から前半頃の遺物が量は少ないものの出土した。確認した遺構の大半は江戸時代のものであり、柵や溝等の状況から街路北辺の位置を押さえることができた。また土坑からは、18世紀代の陶磁器とともに丁銀形土製品が出土した。姫路城跡における丁銀形土製品の出土はこれで3例目である。</p>							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第32集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第328次発掘調査報告書—

平成28年(2016年)年3月31日 発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL (079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 姫路市飾東町庄57番地2

